

# 湘南慶育病院

## 症例概要 症例概要

患者：70代女性

病名：子宮体癌術後

入院期間：2022年12月下旬～2023年5月中旬

### 【経過】

2020年4月 子宮体癌に対し、手術施行。

その後、右脛骨内に転移あり。右下腿に放射線、抗がん剤実施も治療効果乏しい。

2022年9月 PET検査にて右脛骨全体に異常集積あり、右脛骨内に転移の増大認める。

2022年12月上旬 癌の根治の可能性を期待し、右大腿切断術施行。

2022年12月下旬 術後経過良く義足歩行の可能性を考慮しリハビリテーション目的にて当院回復期リハビリテーション病棟へ転院となる。

## 内 容

### 【症例紹介】

病前生活は夫と二人暮らしであり、ADLは自立していた。しかし、子宮体癌の術後より体調が優れず、身辺動作のみ自身で行い、家事動作は夫が中心に行っていた。その頃より、自宅内は松葉杖歩行、自宅外は車椅子介助となっており殆ど自室内で過ごされることが多かった。たまにご家族と車いすで食べ歩きに行くことが楽しみであった。

当院に入院時、著明な可動域制限はなかったが、入院前からの活動性低下に伴い、切断側に重度の筋力低下、非切断側に中等度の筋力低下を認めた。基本動作は軽介助、移動は車椅子だった。認知機能に問題はなく、義足での生活に対しては「車いすでなく場所を気にせず義足で食べ歩きをしたい。料理や掃除等の家事を行い家族に喜ばれたい。」との発言が聞かれた。

### 【チームアプローチ】

目標を義足を装着下での自宅退院を目指した。目標は①歩行を獲得し食べ歩きに行く②家事が自立

し主婦としての役割に復帰することとした。入院当初は車いすベースでの病棟内自立に向けた動作練習、患者さんへ断端管理（傷のチェックや包帯の巻き方の指導等）セルフチェック指導を看護部とリハビリで協同して行った。

入院2ヶ月時点で義足が完成した。その後は義足での歩行練習、日常生活動作練習を中心に行った。義足生活に慣れてもらうため病棟内でも義足を装着し、病棟スタッフに歩行を付き添い日常生活動作を歩行ベースに変更し歩行量の確保、自立の担保を図った。

その結果、入院3ヶ月では両松葉杖、4ヶ月では片松葉杖で病院内生活が自立した。入院4ヶ月時点では1時間程度の立位作業、伝い歩きが可能となり、入院時のHOPEであった調理や掃除の獲得ができた。入院5ヶ月では片ロフトランド杖で病棟内生活が自立し、自宅退院が可能となった。

## 【結果】

65歳以上の大腿切断における歩行再獲得は3割と報告されている。本患は癌に罹患しており切断前からADLは低下し自室内で過ごされる事が多く易疲労性に考慮しながら介入する必要があった。今後は積極的な治療は実施しない予定であり残された時間のQOLを如何に保つかが重要であった。退院時は義足装着下で自室内は伝い歩き、片ロフトランド杖で屋外歩行を獲得し歩行ベースで食べ歩きが可能な能力を習得出来た。義足を装着しての生活範囲が広がることで、立位での調理や掃除等を実施が可能となり、3年振りにご家族に手料理を振る舞えた。ご家族も切断前よりも活動的に動かれる姿に驚き喜ばれていた。退院後にご家族へ主婦としての役割を果たし、場所を気にせず義足で食べ歩きをすることでご家族と有意義に過ごす時間を確保することができている。